

無人駅

山田真砂年

クロッカス地は平らかに明るくて
どんぐりに芽が出てきさううらけし
しらむめのじいんじいと匂ふかな
紙ふうせんぶかぶか突いて日の暮れる
浅間嶺に雲の怠惰や桜餅
東風抜けるステンドグラスの礼拝堂
老人がベンチに並び鳥帰る
牡丹の芽傘を迷ひしほどの雨
春雨にかすんであれはアパホテル
日照雨して鴉も恋の松の枝
ペコちゃんが入口にゐて春の雨
曇天も空は明るき古巢かな
もやもやと桜芽吹きぬ段葛
対岸の桜へボート漕ぎゆけり
無人駅日陰に残る雪踏んで
庭に積む浅間噴石残る雪
耕しに日はあまねくも山仰ぐ
枝に掛け春のコートにスマホ鳴る
噴石の欠片と並び路の臺
寄居虫のいま貝のやう昼の月
古書店に余寒のかくも深きかな
人間の息に汚れて夕桜
春うらら角を持たざる力石
鳥の恋真つ逆さまに男坂
昼餉時ねむしねむしと八重桜